

# **耳原遺跡発掘調査概報**

**茨木市教育委員会**

## は　し　が　き

本市は昭和23年1月1日、茨木町・春日町・三島村・玉櫛村が合併し、全国で第215番目、大阪府下で第13番目の「市」として発足いたしました。その後、昭和32年8月30日に最後の境界変更がなされてから、今日の市域となつたのであります。

私達の郷土茨木には、今尚多くの美しい自然が残されております。またこの自然を舞台とし且つ源である文化財も地下に数多く埋もれており、今日に生きる我々の生活に大きな関連をもちつづけております。しかしながらこうした貴重な埋蔵文化財は、今回の耳原遺跡の発掘調査が住宅開発による事前調査であったように、都市化に伴う開発事業が急激に進み、そのあおりを受け破壊の危機にさらされているのが現状です。

幸いにして耳原遺跡の発掘調査に際しましては、開発業者のご理解をいただき無事調査を完了することができましたことを感謝いたします。

現代に生きる我々の「祖」である過去の人達の足跡を知ることはもとより、そこにはどのような進歩と発展のあったことを知ること、またそれを明らかにしていくことも大切なことであると思います。

最後に発掘調査に従事された方々をはじめ、地元の方々、ご指導下さいました諸氏各位に感謝の意を表しますとともに、今後共文化財の保護顕彰につきまして認識昂揚をあえて念願するものであります。

茨木市教育委員会

教育長 桑田恬身

## 例　　言

- I 本概報は、茨木市耳原一丁目付近における一戸建住宅開発に伴って、昭和54年5月10日より、同年8月末日までに実施した発掘調査の成果の一部をまとめたものである。
- II 発掘調査にあたっては、茨木市教育委員会社会教育課文化財係・奥井哲秀を担当者とし、東奈良遺跡調査会の井上直樹・宮脇薰・白井忠雄（現高島町教育委員会）・石田治雄・大野恵三子・高田敬子の他、谷本博の各氏に協力を得た。
- III 発掘調査については、明伸興産株式会社、藤井組の各位に御協力を得たことを感謝いたします。
- IV 本概報の内容については、まだ末整理のものが多く発掘調査結果のうち、主だった繩文時代晩期の壺棺を中心にして記した。
- V 壺棺については、その形態から深鉢棺と呼称した方がいいものもあるが、本書では壺棺として統一した。
- VI 本文の執筆及び編集は、奥井哲秀が担当した。
- VII 本概報作成までに、原口正三・佐原真・田代克己・泉拓良・家根祥多氏他多数の方々にご教示を得ましたことを感謝いたします。

## 本文目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 第 I 章 遺跡の概観 .....   | 2  |
| 第 II 章 調査経過 .....   | 5  |
| 1.調査日誌 .....        | 5  |
| 2.調査地区の設定 .....     | 10 |
| 第 III 章 遺構・遺物 ..... | 11 |
| 1.層位 .....          | 11 |
| 2.遺構 .....          | 12 |
| 3.遺物 .....          | 13 |
| 第 IV 章 まとめ .....    | 28 |

## 挿図目次

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 第 1 図 遺跡周辺地図 .....        | 1  |
| 第 2 図 遺跡近辺略図 .....        | 3  |
| 第 3 図 遺跡地区割図及び甕棺位置図 ..... | 10 |
| 第 4 図 C-6・7 地区北壁断面図 ..... | 11 |
| 第 5 図 1号甕棺実測図 .....       | 15 |
| 第 6 図 2号甕棺実測図 .....       | 15 |
| 第 7 図 3号甕棺実測図 .....       | 16 |
| 第 8 図 4号甕棺実測図 .....       | 16 |
| 第 9 図 5号甕棺実測図 .....       | 17 |
| 第 10 図 6号甕棺実測図 .....      | 17 |
| 第 11 図 7号甕棺実測図 .....      | 18 |
| 第 12 図 8号甕棺実測図 .....      | 18 |
| 第 13 図 9号甕実測図 .....       | 19 |
| 第 14 図 9号甕下部敷石実測図 .....   | 20 |

|        |                |    |
|--------|----------------|----|
| 第 15 図 | 9号壇最下部土塙実測図    | 20 |
| 第 16 図 | 10号壇棺実測図       | 21 |
| 第 17 図 | 11号壇棺実測図       | 21 |
| 第 18 図 | 12号壇棺実測図       | 22 |
| 第 19 図 | 13号壇棺実測図       | 22 |
| 第 20 図 | 14号壇棺実測図       | 23 |
| 第 21 図 | 17号壇棺実測図       | 23 |
| 第 22 図 | 15号壇実測図        | 24 |
| 第 23 図 | 16号壇棺実測図       | 25 |
| 第 24 図 | 土塙-1 遺物出土状況実測図 | 26 |

### 図 版 目 次

|       |                 |    |
|-------|-----------------|----|
| 図 版 1 | 遺構全体            | 32 |
| 図 版 2 | 遺構全体            | 34 |
| 図 版 3 | 遺構全体            | 36 |
| 図 版 4 | 1号壇棺出土状況        | 38 |
|       | 2号壇棺出土状況        | 38 |
| 図 版 5 | 3~6号壇棺出土状況(北より) | 40 |
|       | 3号壇棺出土状況        | 40 |
| 図 版 6 | 4号壇棺出土状況        | 42 |
|       | 5号壇棺出土状況        | 42 |
| 図 版 7 | 6号壇棺出土状況        | 44 |
|       | 7号壇棺出土状況        | 44 |
| 図 版 8 | 8号壇棺出土状況        | 46 |
|       | 9号壇出土状況         | 46 |
| 図 版 9 | 9号壇下部敷石検出状況     | 48 |
|       | 9号壇最下部土塙検出状況    | 48 |

|        |                |    |
|--------|----------------|----|
| 図 版 10 | 1 0 号甕棺出土状況    | 50 |
|        | 1 1 号甕棺出土状況    | 50 |
| 図 版 11 | 1 2 号甕棺出土状況    | 52 |
|        | 1 3 号甕棺出土状況    | 52 |
| 図 版 12 | 1 4 号甕棺出土状況    | 54 |
|        | 1 5 号甕出土状況     | 54 |
| 図 版 13 | 1 6 号甕棺出土状況    | 56 |
|        | 1 7 号甕棺出土状況    | 56 |
| 図 版 14 | 土塁-1 検出状況(南より) | 58 |
|        | 上塁-1 検出状況(東より) | 58 |
| 図 版 15 | 1 号甕棺          | 60 |
|        | 2 号甕棺          | 60 |
| 図 版 16 | 3 号甕棺          | 62 |
|        | 4 号甕棺          | 62 |
| 図 版 17 | 5 号甕棺          | 64 |
|        | 1 1 号甕棺        | 64 |
| 図 版 18 | 耳原遺跡出土の石製品     | 66 |
| 図 版 19 | 耳原遺跡出土の石製品     | 68 |
| 図 版 20 | 遺構全体実測図        | 70 |

## 表

|           |    |
|-----------|----|
| 甕棺出土時の観察表 | 27 |
|-----------|----|



第1圖 遺跡周辺地図

## 第1章 遺跡の概観

大阪市の北東部、三島平野の一角をなす茨木市は古くから京都・大阪を結ぶ交通の要所として栄え、北に古生層よりなる標高約300mの北摂山地・老ノ坂山地が東西に長く連なり、西に大阪層群で形成された吹田市の千里丘陵、東に高槻市、南に摂津市と広がる平野部を形成し、南北に長く、東西に短い地形で、大きくは北側の山地部と南側の平野部とに分けることができる。

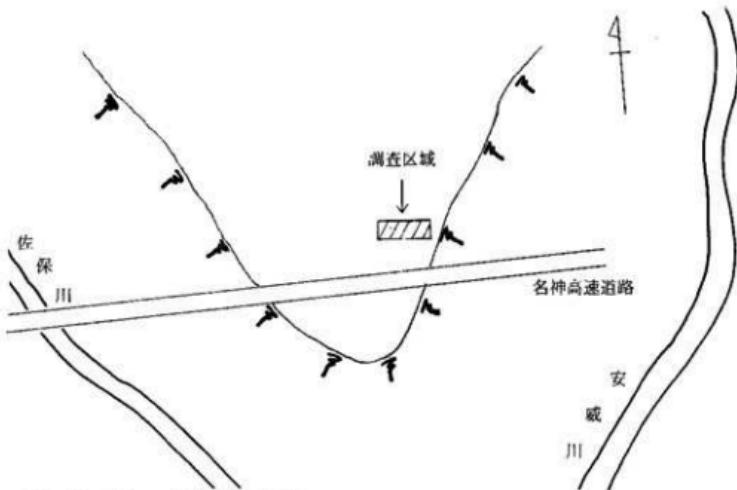
市内を流れる河川は、そのすべてが北部の山地部に源を発し曲折しながらも南の平野部へと流れ、西から勝尾寺川・佐保川・その下流の茨木川・安威川・さらに市域の南西部の一角に新しくつけ替えられた大正川等がある。なかでも安威川は古くからその利用度が最も高く、水の利権等をめぐる争いは絶えることがなかったということである。また佐保川は中河原で勝尾寺川と合流したあと田中町辺りで安威川と人工的に結びつけられたため下流の茨木川は塞き止められ廢川となり元茨木川と呼ばれるようになった。これらの河川は南の神崎川へと流れ、大阪湾へとそいでいる。

河川の流れがゆるやかとなる平野部一帯は、古代の人々にとっては住みやすく生活に適した場所もあり数多くの遺跡が埋もれている結果となっているのである。

これまでに発見された最古のものは、郡や太田付近で採集された旧石器時代の国府塙ナイフ型石器がある。その後縄文時代前半の断片的な上巻の採集はあるものの、土中にその生活の跡を確実に残しているものとして、縄文時代初期の耳原遺跡がある。弥生時代になると丘原遺跡の他、東奈良遺跡・日垣遺跡・太田遺跡・郡遺跡・中条遺跡等、遺跡数が前代と比べ極端に増え、なかでも東奈良遺跡は茨木市における拠点的な集落であり、ここから分村化していく集落がその周辺に増えつづける。また銅鐸の鋳型等の出土から高槻市の安満遺跡とともに全国的にも有数の遺跡として数えられている。古墳時代に入ると北の山地部にその多くを見るが平地のものとしては、太田の低い台地上に全長226mで濠をもつ繼体天皇陵がある。この犬皇陵説については、高槻市の今城塚が本当の繼体天皇陵であるという説もあり、今だに論議がくり返えされている。さらに耳

原遺跡の北約200mの台地上に立派な横穴式石室をもつ耳原古墳があり、北西約200mには、方形墳で東・西・南の三方に濠をもつ耳原方形墳（昇摺古墳）がある。また上穂積から春日にかけては、平地化のために消滅し基底部のみを残すA・D5C末頃の古墳が小規模発掘等により確認されている。

一方、北の山地部をみると、市民に親しまれハイキングコースにもなっている標高約510mの竜王山が高くそびえ、北西部には弥生時代の石製品等が採集された山頂遺跡であり茨木で最も高所に位置する石堂ヶ丘遺跡がある。この山地部には古墳が多く存在するが、そのほとんどが山地部と平野部が接する尾根上に位置する。これら尾根上には、紫金山古墳、これより東の佐保川をはさんで将軍山古墳・安威古墳群、さらに東の安威川をはさんで高槻市の塚原古墳群や弁天山古墳群等がある。なかでも前期古墳として有名な紫金山古墳は、東向きに造られた前方後円墳で、全長約102mで、後円部に横穴式石室をもち、その内部より中国製・日本製の合わせて12面の鏡が出上した他、数多くの銅製品・鉄製品・石製品が副葬されていた。この古墳の周囲には、南塚・青松塚・海北塚等の古墳が集まっている。これらの古墳の他、新屋古墳群・將軍塚・大門寺古墳・桑原古墳群などが存在している。



第2図 遺跡近辺略図

こうした A・D 6 C 代までの遺跡が数多く存在する茨木市のはば中央に耳原遺跡がある。遺跡は、西約 400 m に佐保川、東約 500 m に安威川が南流し、南へ約 900 m のところで諏訪川が合流する間の舌状にはり出した台地上に位置し、生面（地山）の高さは標高約 23 m ( O · P · ) をはかる。（第 2 図）

以前よりこの台地上では、表面採集等により土器片・石器片が発見されており遺跡の存在を知る手掛りとなっていたが、それをより確実としたものは、昭和 39 年にこの台地上の先端部を横切って開通した名神高速道路建設に伴う事前調査で、遺構と共に弥生式土器が出土したことであった。さらに昭和 50 年以降、田畠地であったこの付近に住宅開発の波がおよせ、ミニ開発による小規模発掘が点々と行なわれたが遺跡の性格を知るまでには至らなかった。しかしながら遺跡はこの台地上の先端部ほぼ全域（東西約 850 m ・ 南北約 300 m ）に広がっていることが判明し、採集された遺物の中に若干ではあるが縄文時代晩期の土器片も含まれていた。このことからこの地域に縄文時代晩期から人々が住み始めていたことが判ったのである。

昭和 54 年、遺跡の東端にあたる所に、大規模な一戸建住宅開発の申請が、代表・明伸興産株式会社の手によって出され、その事前調査を約 2,300 m<sup>2</sup> の規模で、同年 5 月 10 日より、8 月末日までの期間行った。この調査では、これまでの小規模発掘では把握できなかった遺跡の性格を知り得ることができたとともに、縄文時代晩期の塚古墳 16 基他、数多くの考古学的資料が得られたことは、茨木市にとどまらず、三島平野の縄文遺跡として新たな 1 ページをつけ加える結果となったのである。

## 第Ⅰ章 調査経過

昭和54年、茨木市耳原一丁目2・3の地域において、一戸建住宅の開発申請が、この開発の代表・明伸興産株式会社によって提出された。この地域は大阪府埋蔵文化財分布図により周知の耳原遺跡の範囲内であるため、各関係部局より教育委員会に書類がまわされた。

その結果、市教委と明伸興産株式会社との間で発掘調査に関する協議が幾度かくり返され、幸いにして同株式会社には、埋蔵文化財の重要性をご理解いただき約2,800m<sup>2</sup>の範囲で建築に先立って発掘調査を行なうことになった。調査には、同株式会社の下請けとして藤井組に協力をいただき、同年5月10日より、同年8月末日までの間、市教委と東奈良遺跡調査会調査員等によって進められた。

### 調査日誌

5月10日(木) 晴

重機による床土までの第1次掘削を行う。北西の角から始め約80cmで礫を含んだ地山がみられた。故に遺物包含層はみられなかった。

5月11日(金) 晴

昨日の続きをを行う。掘削土中あるいは表面に弥生式土器他、小さな須恵器片が数片みつかる。

5月12日(土) 晴

重機による第一次掘削の続きを、すでに掘り終えたところの雨水よけの溝を約20cm巾で掘る。

5月14日(月) 雨

作業中止

5月15日(火) 時々晴

溜まった雨水の排水処理と第一次掘削の続きをを行う。

5月16日(水) 晴

第一次掘削の続きを、周囲の削掘りを行う。若干の包含層が検出され始めた。

5月17日(木) 雨のち曇

午前中雨のため作業中止。午後より溜まり水の排水作業を行う。

5月18日(金) 晴

第一次掘削が約 $\frac{1}{3}$ 程度終る。整地作業を並行して行うが、こぶし大の石が多くてやりにくい。

5月19日(土) 晴

第一次掘削の続きを整地作業を行う。若干の遺構が検出される。

5月21日(月) 晴

第一次掘削約 $\frac{2}{3}$ 程度終る。

|  |  |
|--|--|
| 茶褐色粘質土層の遺物包含層が区域の東半分より顯著になる。   | 柱穴や溝等の遺構を検出。C-4地区は地山に小石が多い。                          |
| 5月23日(水) 晴<br>調査範囲と周辺地域の平板測量を $\lambda_{500}$ で行う。                   | 6月 5日(火) 晴<br>B-4~3地区は包含層がなく整地作業のみ行う。D-3地区で壺棺が検出される。 |
| 5月24日(木) 晴<br>掘削土中より、石包丁1点と弥生時代中期の土器片、須恵器片等が出土。電話と水道がひける。            | 6月 6日(水) 晴のち曇<br>昨日の続きを行う。                           |
| 5月25日(金) 晴<br>重機による第一次掘削を完了する。整地作業とともに周囲の消掘りを行う。                     | 6月 7日(木) 雨<br>雨のため作業を中止。                             |
| 5月26日(土) 晴のち曇・雷雨<br>地区割りの設定を図面上で行い、仮杭を現場に打つ。午後3時すぎ雷雨のため作業中止する。       | 6月 8日(金) 晴<br>包含層除去作業および整地作業。雨水の排水作業。弥生時代の石包丁1点出土。   |
| 5月28日(月) 晴<br>整地作業および包含層の除去作業を行う。<br>E-4地区の整地中に個体の可能性のある晚期土器が一部出土する。 | 6月 9日(土) 晴<br>柱穴などの遺構を検出。                            |
| 5月29日(火) 晴<br>包含層の除去作業。弥生式土器等が出土する。                                  | 6月11日(月) 曇・雨<br>昨夜来の雨と、午前中に再び集中豪雨のため午後から雨水の排水作業を行う。  |
| 5月30日(水) 晴<br>割り付けの基本杭を打つ。   | 6月12日(火) 晴<br>残っていた溜水の排水作業と整地作業。                     |
| 5月31日(木) 晴<br>弥生式土器や石鏡等が出土。  | 6月13日(水) 晴のちくもり<br>整地作業                              |
| 6月 1日(金) 晴<br>ベルトコンベアの故障で作業は手間どる。                                    | 6月14日(木) 雨<br>雨のため作業中止                               |
| 6月 2日(土) 晴<br>東側より南北5のラインまで掘り進む。<br>遺物は弥生式土器が多く、コンテナバットに約2箱出土。       | 6月15日(金) 晴<br>雨水の排水作業と整地作業。                          |
|  | 6月16日(土) 曇のち雨<br>整地作業および一部遺構掘りを行う。                   |
|  | 6月18日(月) 曇のち晴<br>整地作業及び細かい割り付けを行う。                   |

|  |  |
|--|--|
| 6月19日(火) 曇<br>B-4地区の土塙等の造構掘りを行う。<br>E-6地区で甕棺と考えられる土器の一部を検出する。        | 7月 2日(月) 曙のち雨<br>D-7地区の黒色粘質土層を掘り始めるが、<br>溜り水の排水作業に手がかかる。                     |
| 6月20日(水) 曙<br>B-5地区において、縄文時代の石器が包含層中より出土。さらに堆土中より石器を数点採集。            | 7月 3日(火) 曙のち晴<br>やっと晴れ間がのぞく。溜り水の排水作業の続き。                                     |
| 6月21日(木) 曙のち晴<br>造構掘りおよび整地作業   | 7月 4日(水) 晴<br>一部残っている溜り水の排水作業と、黒色粘質土層を掘る。遺物は少ない。                             |
| 6月22日(金) 晴<br>南北5~7ラインまでの、茶褐色粘質土層の包含層下に堆積した黒色粘質土層は、縄文晩期の堆積層の可能性大である。 | 7月 5日(木) 晴<br>造構掘りを行う。   |
| 6月23日(土) 曙のち雨<br>C-5地区等の造構掘り。  | 7月 6日(金) 晴<br>黒色粘質土層の除去作業と造構掘り。  |
| 6月25日(月) 曙<br>C-5地区は柱穴が多く中には縄文の柱穴もあることを確認。                           | 7月 7日(土) 晴<br>1号甕棺・2号甕棺の写真撮影を行う。   |
| 6月26日(火) 曙<br>C-5・C-4地区の柱穴等の造構掘り。                                    | 7月 9日(月) 晴<br>1号甕棺・2号甕棺の実測図作成とレベルをとる。  |
| 6月27日(水) 雨<br>すごい雨のため作業中止  | 7月 10日(火) 曙のち小雨<br>1号甕棺の内部へ落ち込んだ土器のとりあげ。小雨のため下の部分の写真撮影できず明日に回す。2号甕棺は全部とりあげる。 |
| 6月28日(木) 雨のち曇<br>調査区全般が雨のため、ほぼ冠水する。このため包含層の堆土の表面採集を行い、石器数点を発見する。     | 7月 11日(水) 晴<br>1号甕棺を写真撮影したのちとりあげる。   |
| 6月29日(金) 雨<br>雨のため作業中止   | 7月 12日(木) 曙<br>他の甕棺の輪郭を出す他、造構掘り。   |
| 6月30日(土) 雨<br>雨のため作業中止   | 7月 13日(金)<br>4・5号甕棺の実測図作成とレベルをとる。  |
|  | 7月 14日(土) 晴<br>3・4・5号の甕棺の写真撮影  |

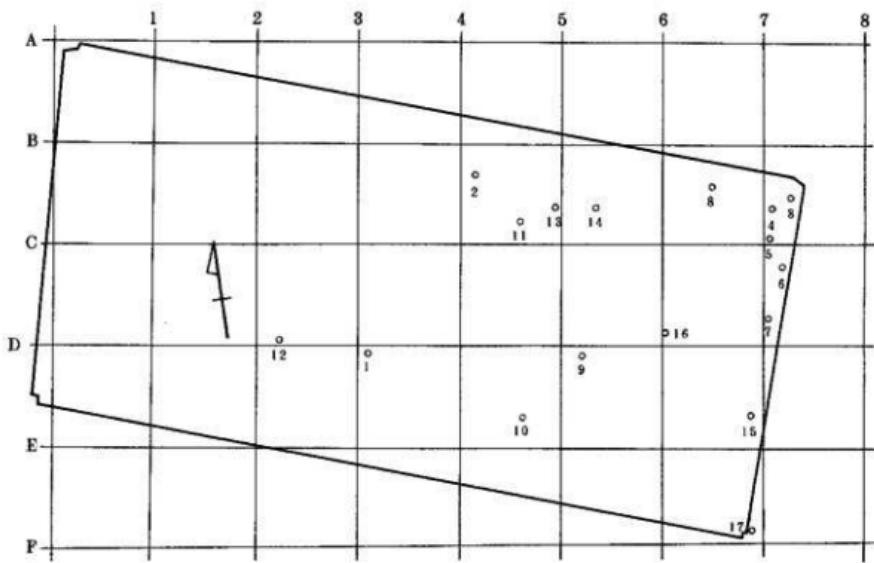
|   |   |
|---|---|
| 7月16日(月) 晴  | 7月26日(木) 晴  |
| B-2地区の土塁-1より弥生時代前期の壺等の個体が出土。掘り方からみて大きな貯蔵穴の可能性がある。   | 遺構掘りおよび整地作業。  |
| 7月17日(火) 晴のち曇   | 7月27日(金) 晴  |
| B-2地区の土塁-1の遺物の輪郭を出す。数個体が含まれている。   | B-2地区の土塁-1の実測図作成と、F-4地区の残っていた包含層の除去作業。              |
| 7月18日(水) 曇  | 7月28日(土) 晴  |
| 昨日と同じ作業を行う。   | 見学会。実数約220名。  |
| 7月19日(木) 晴  | 7月29日(日) 晴  |
| C-6地区の柱穴群中より壺棺が2基検出される。いずれも残存状態は悪い。13号・14号とする。  | 8・4・15号の壺棺をとりあげる。                                   |
| 7月20日(金) 晴  | 7月30日(月) 晴  |
| F-4地区とF-5地区の中間で、弥生時代中期の円形豎穴住居跡を検出する。  | 壺棺の実測図・写真撮影・レベルとり等を行なう。                             |
| 7月21日(土) 晴  | 7月31日(火) 晴  |
| 東側の下層である黒色粘質土層の除去作業をほぼ終える。地山が巾約10mで南北方向に凹んでいる。この中央のD-6地区で弥生時代前期の合口棺を黒色粘質土層の最上面で検出する。16号とする。 | 壺棺の写真撮影をできるだけ撮らうと遅くまでねばつたがだめであった。                   |
| 7月23日(月) 晴  | 8月1日(水) 晴   |
| 調査区域での壺棺数は縄文時代晩期15基、弥生時代前期1基となる。  | 見学会以来、一般の人、専門の人の見学者が多くなる。耕作時期のため、一段低い現場に水がたまりやすくなる。 |
| 7月24日(火) 晴  | 8月2日(木) 晴   |
| それぞれの壺棺の輪郭をだす作業および遺構掘り。   | 連日の猛暑。壺棺の実測図作成とレベルとりが全て終了する。                        |
| 7月25日(水) 晴  | 8月3日(金) 晴   |
| 7月28日に予定している見学会の資料づくりのため、壺棺および月立った遺構の略図を行う。運いつゆあけ宣言。  | 他の遺構掘り。午後3時通り雨。                                     |
| 8月6日(月) 晴   | 8月4日(土) 晴   |
|   | 昨日同様の作業を続ける。  |
| 8月7日(火) 雨のち晴  | 8月6日(月) 晴   |
|   | 遺構掘りと並行して、プラン図の作成にとりかかる。1m区割に削る。                    |
|   | 昨日同様の作業。午後8時半より雷を伴う大                                |

|  |                         |  |
|--|-------------------------|--|
| 粒の雨が降る。                                      |                         | したところ井戸であることを確認する。中から鎌倉期とおもわれる土器片が出土する。          |
| 8月 8日(水) 晴                                   |                         | 8月 24日(金) 晴                                      |
| 8月 9日(木) 晴                                   |                         | 調査区域の東南角より発掘1基検出のため拡張する。17号とする。                  |
| 8月10日(金) 晴                                   |                         |  |
| 8月11日(土) 晴                                   |                         |  |
| 8月13日(月) 雲のち雨                                | 各地区的プラン作成とレベルをとる作業を続ける。 | 8月 25日(土) 曇                                      |
| 8月14日(火) 晴                                   |                         | 8月 26日(日) 曙                                      |
| 8月15日(水) 晴                                   |                         | 各地区的レベルをとり終える。                                   |
| 8月16日(木) 晴                                   |                         | 8月 27日(月) 雨                                      |
| 8月17日(金) 晴                                   |                         |  |
| 8月18日(土) 晴                                   |                         | 8月 28日(火) 晴                                      |
| 8月20日(月) 曙                                   |                         | 全体写真のための整地作業、および9号発掘の下の掘方を調査する。                  |
| 8月21日(火) 雨                                   |                         |  |
| 台風11号の影響で、昨夜から雨が降りつき、晴れ間をぬって排水作業およびレベルとりを行う。 |                         | 8月 29日(水) 晴                                      |
| 8月22日(水) 曙のち雨                                |                         | 全体遺構の写真撮影を行う。                                    |
| 写真撮影用のタワーを建てるが、午後3時からの雷雨で打ち切る。               |                         | 8月 30日(木) 晴                                      |
| 8月23日(木) 晴                                   |                         | 平板により等高線を調査区域の地山面で測る。                            |
| プランでは確認できなかったが、いつまでも水のひかない個所がD-1地区にあり少し試掘    |                         | 8月 31日(金) 曙                                      |
|  |                         | 平板測量の続きをと、仮点までの水準点を測る。<br>仮点は=O・P・22m88cm9mmである。 |
|  |                         | 全調査を完了する。  |

## 2 調査地区の設定

調査地区の設定には、区割りができるだけ調査区域と平行するように、調査区域の西側を南北に通る農道を基本とした。その結果、南北基本軸が、磁北より8度東へふっている。

地区割りは、東西を数字の1・2・3………とし、南北をA・B・C………とした。どの地区も東南角を基本として呼称した。間隔はすべて9m四方とし、包含層出土の遺物は、これに従ってとりあげた。(第3図)

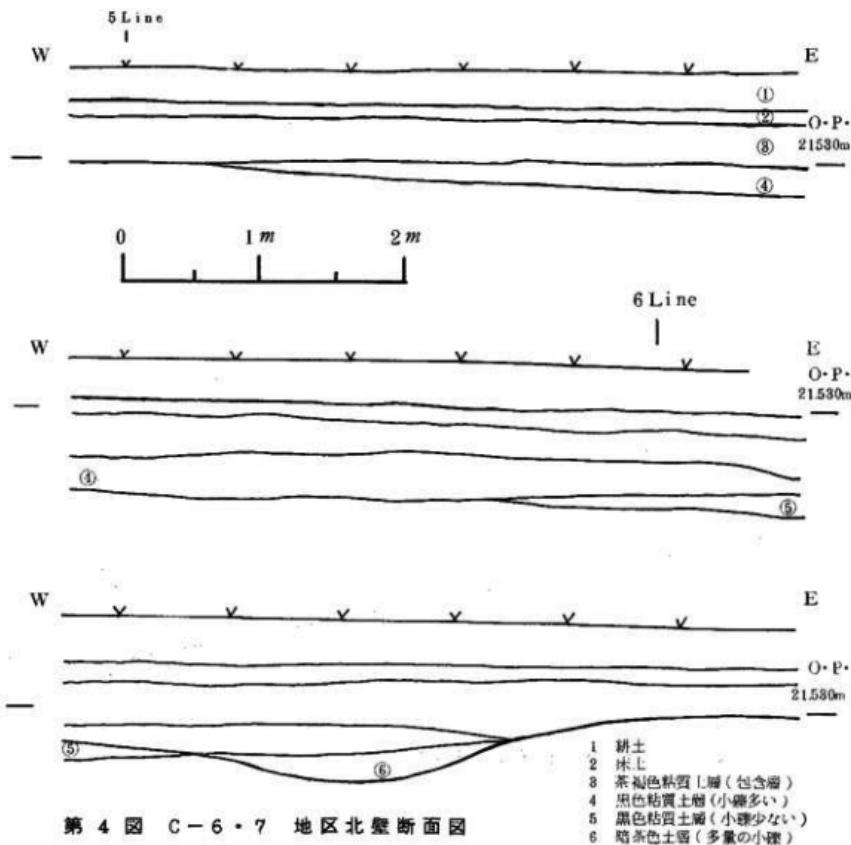


第3図 遺跡地区割り図及び発掘位置図 1/500

## 第Ⅱ章 遺構・遺物

### 1 層位

第1層の表面耕土約40cmをとり除くと、第2層である黄色土層の床土が約5cmで全体に堆積している。第3層として茶褐色粘質土層の遺物包含層が地区によってみられるが、調査地区の西側や一部中央では全くみられない。しかし地形が若干西から東へと高低差がある関係から、調査区域の中央から東側では、茶褐色粘質土層の単純な遺物包含層が約25cmの厚みで残されている。



第4図 C-6・7 地区北壁断面図

B - 6 ・ C - 6 地区から F - 7 地区までの北から南にかけて、巾約 10 m の自然的条件によると考えられる凹地が溝状のようになっており、上層の遺物包含層をとり去ると第 4 層として、黒色粘質土層の堆積が最も厚いところで約 40 cm となっている。

この様に調査区域全体の堆積層は非常に単純であり、これと同じように各遺構内の堆積層も若干のブロック状の堆積がみられるものもあるが、ほぼ 1 層である。第 5 層と名づけた地山は、黄色の粘土層であり、全域とも変わりがないが、西側および中央辺りでは、こぶし大の礫層を多く含む。（第 4 図）

## 2 遺構

遺構としては、縄文時代晚期の壙棺 16 基（1 号～15 号・17 号）弥生時代前期の合せ口棺 1 基（16 号）、また同晚期のものとして、長さ約 1.1 m・巾約 0.5 m・深さ約 0.2 m の規模をもつ土塙墓とおもわれるものが 1 基、遺物の出土をみないがこれと同様のものが他に数基検出されている。さらに柱穴等も検出されているが、断定的な時期は不詳である。弥生時代前期の遺構は、長さ約 2.5 m・巾約 1.6 m・深さ約 0.4 m の大きな袋状になった貯蔵穴とおもわれる土塙-1（第 24 図）が 1 基みられる。他に土塙が数基検出され、中には木棺を入れたと思われるものもある。また柱穴等もみられるが時期不詳である。弥生時代中期の遺構は最も多くみられ、C - 4 地区では、長さ約 2.5 m 巾約 1.4 m・深さ約 0.6 m の規模をもつ大きな土塙と（大型土塙-1）それよりやや小さい規模（大型土塙-2）の土塙 2 基が検出されている。これも先述の前期の土塙-1 と同様貯蔵穴の機能をもつものとおもわれる。他に F - 6 地区等からも土塙が検出されている。また、F - 5 地区より直径約 5 m の規模をもつ円形の竪穴住居跡が 1 基検出され、その溝内より畿内第Ⅳ様式の壺片が出土しているところから、この時期のものであろう。その後の時期の遺構はほとんど検出されず、調査区域の西側でわずかの遺物から、平安・鎌倉期とおもわれる掘立柱建物跡（4 軒 × 2 軒以上）が 1 基と、直径約 2.5 m・深さ約 1.5 m

の素掘りの井戸等が検出されたのみである。(図版20)

これらの遺構から全体的な流れをみると、柱穴(時期不詳がほとんどであるが縄文時代晚期のものもかなり含んでいると思われる)がB-5地区よりE-4地区へ、馬蹄形状に検出されており、その内部と考えられるD-4地区では遺構があまりないことから、住居が馬蹄形状に並らんでいたと推測される。また甕棺は、これら柱穴群中と東の端に多くみられる。弥生時代前・中期の遺構は、あまり統一性がみられず、その中心は今回の調査区域よりも少し西南の地域に可能性があると思われる。このことは、調査区域の南側E-5地区で中期の竪穴住居跡が検出されていること、またこれまでの小規模発掘によって西側に弥生時代の遺構等が確認されていることなどから考えられる。

注1 9号・15号は便宜上甕棺と呼称する。

### 3 遺 物

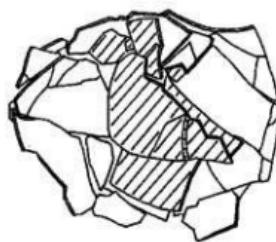
縄文時代晚期のものとしては、遺構としてもとらえられる甕棺16基はほとんどが不完全ながらも復元可能であり、この検出および出土によって、耳原遺跡の大体の性格を知ることができた。甕棺の詳細については末整理のものが多いので本報告までに検討することにしたい。他に若干の破片が包含層等より出土している。また石製品が出土しており、石鏃約60本・石錐4本・石斧・石剣・石冠とおもわれるもの等が出土している。

弥生時代前期では、16号の合せ口棺の他、B-2地区の土塙-1より、壺・甕・鉢等が10数個体出土している。いずれも畿内第I様式の新しい部類のものである。石製品は少なく石包丁等の小破片が数点出土しているのみである。中期になると遺物量は増え、C-4地区の大型土塙-1・2より櫛描き直線文や、波状文・押線文など畿内第III・IV様式のものが多く出土している。(図版20)また包含層からの出土も、弥生時代中期のものが圧倒的に多く、縄文時代晚期のものは少ない。

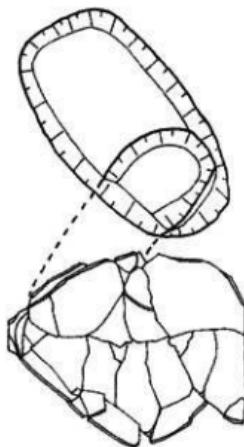
これら縄文・弥生時代の土器・石器等の他に、若干の須恵器片・土師器片・瓦器片などがみられ、さらにC-2地区の独立柱建物跡の最も南の柱穴より灯明皿、井戸

内より平安～鎌倉期の上器片等が出土している。木器片等は一片も出土しておらず、これらは土壌の性質状腐植したものと思われるが、ただひとつ先述の掘立柱建物跡の柱穴より柱痕が1本出土した。全体的には弥生時代のものが最も多く出土している。出土量は、コンテナパッド（遺物収納箱）に約100箱（龜棺含む）である。

注1 9号・15号は便宜上、龜棺と呼称する。

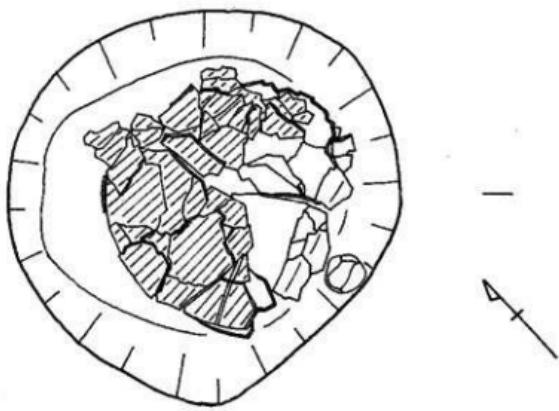


第5図 1号壺棺実測図  $\frac{1}{10}$



第6図 2号壺棺実測図  $\frac{1}{10}$

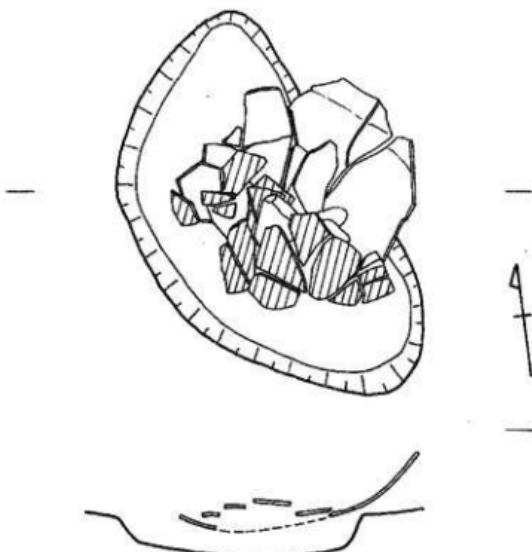




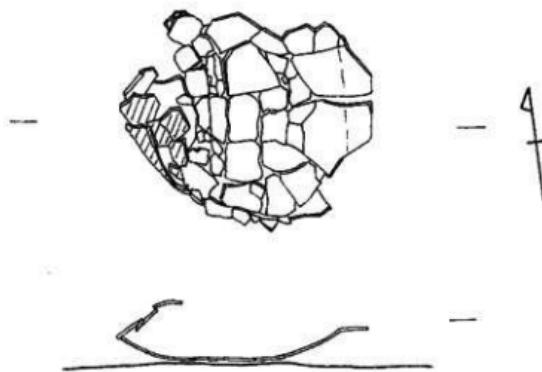
第 7 図 3号 sarcophagus 実測図  $\frac{1}{10}$



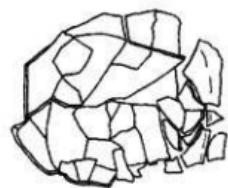
第 8 図 4号 sarcophagus 実測図  $\frac{1}{10}$



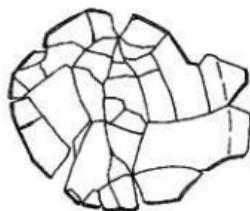
第 9 図 5号靈棺実測図  $\frac{1}{10}$



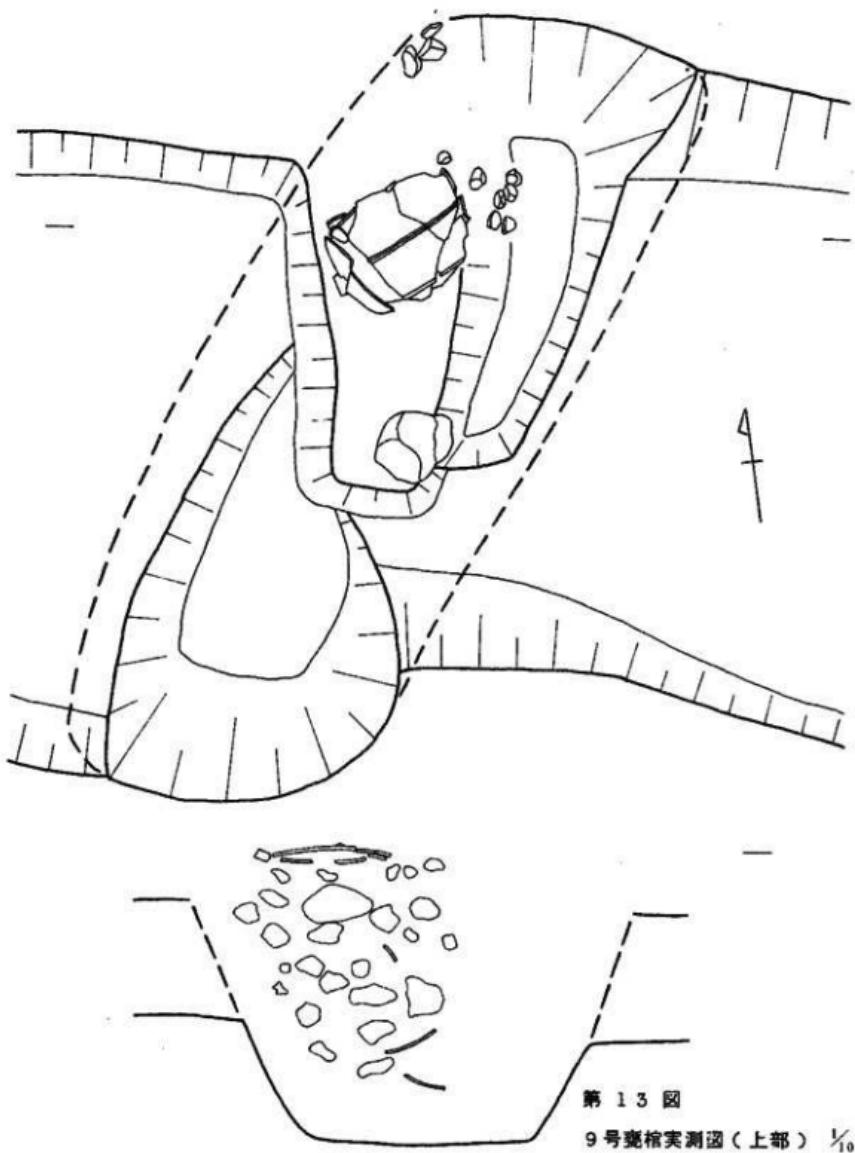
第 10 図 6号靈棺実測図  $\frac{1}{10}$



第 11 図 7号墓棺実測図  $\frac{1}{10}$

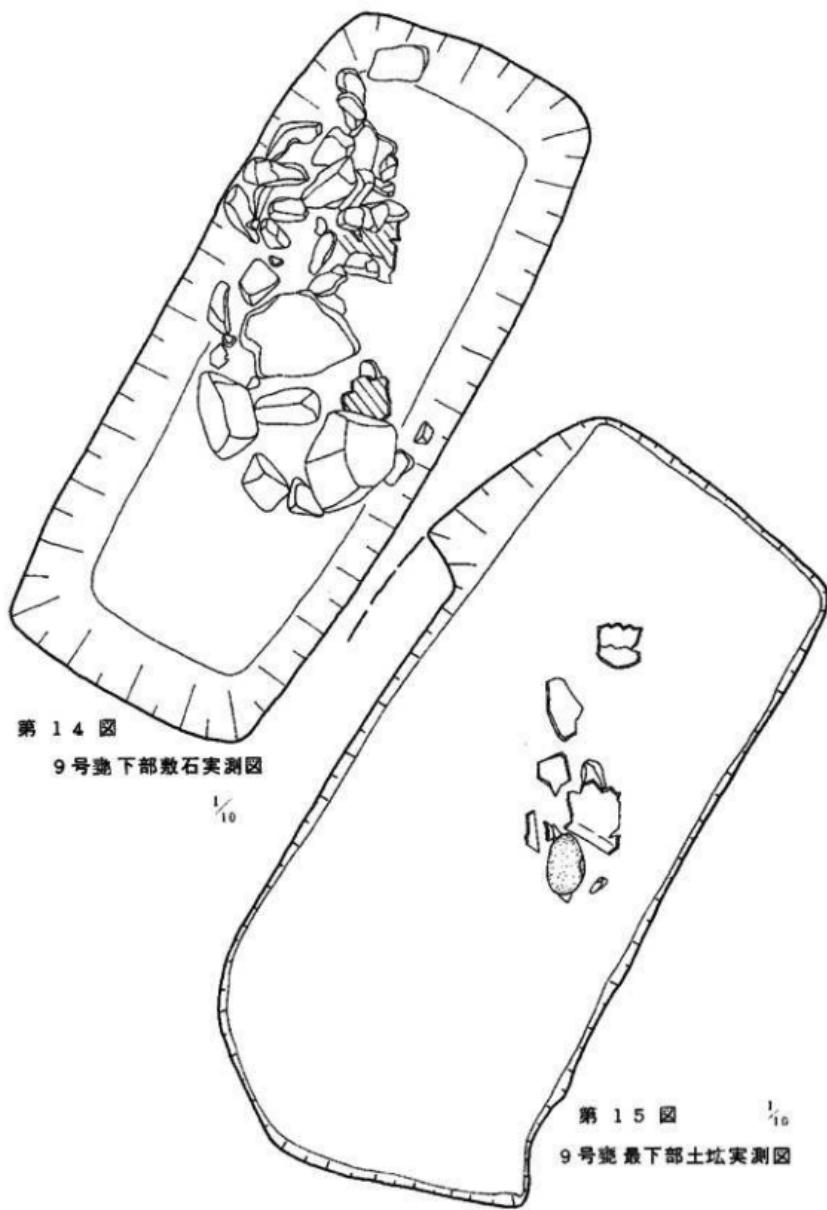


第 12 図 8号墓棺実測図  $\frac{1}{10}$



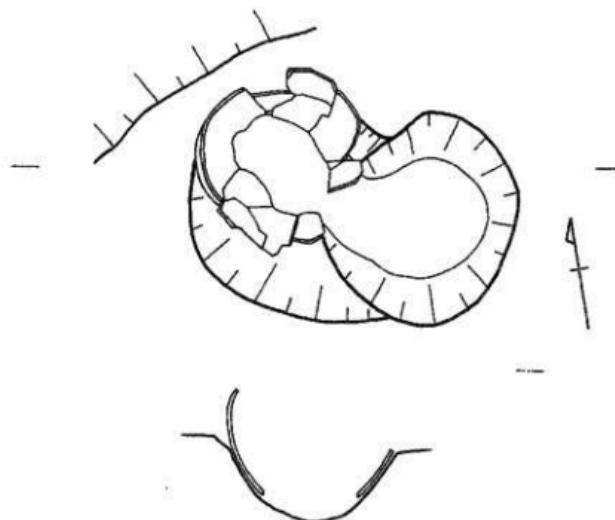
第 13 図

9号墓棺実測図(上部)  $\frac{1}{10}$

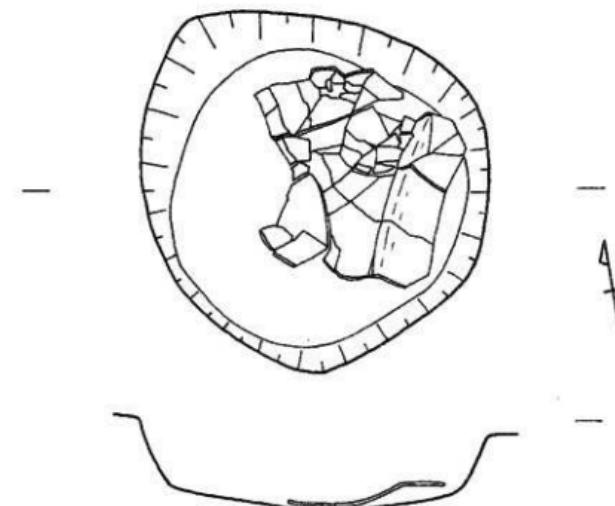


第 14 図  
9号墳 下部敷石実測図

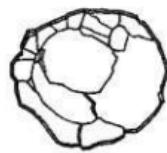
第 15 図  
9号墳 最下部土坑実測図



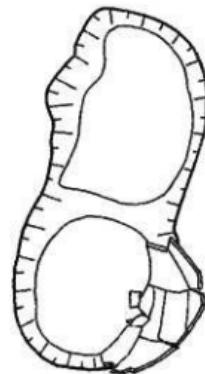
第 16 図 10号 瓢棺実測図  $\frac{1}{10}$



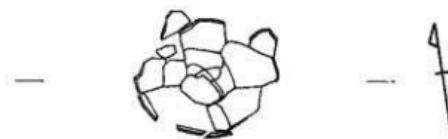
第 17 図 11号 瓢棺実測図  $\frac{1}{10}$



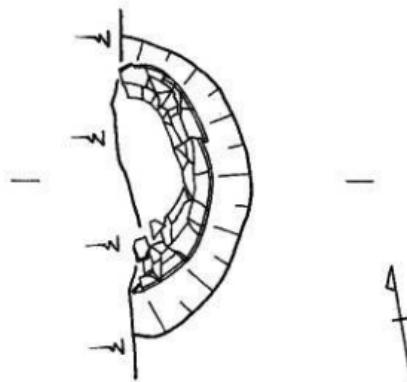
第 18 図 12号 壺棺実測図  $\frac{1}{10}$



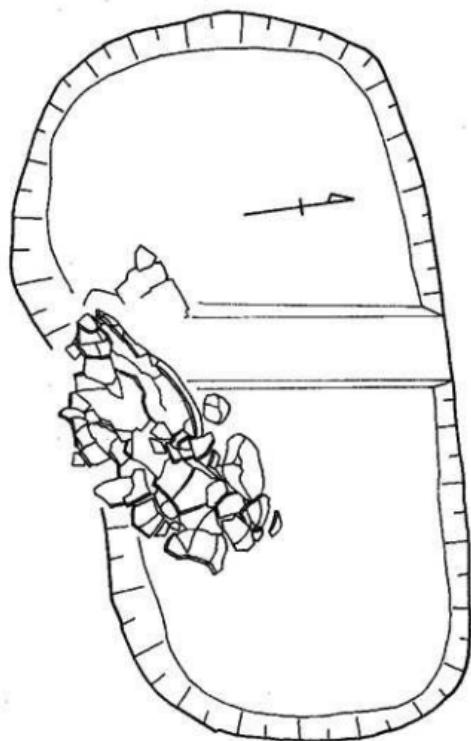
第 19 図 13号 壺棺実測図  $\frac{1}{10}$



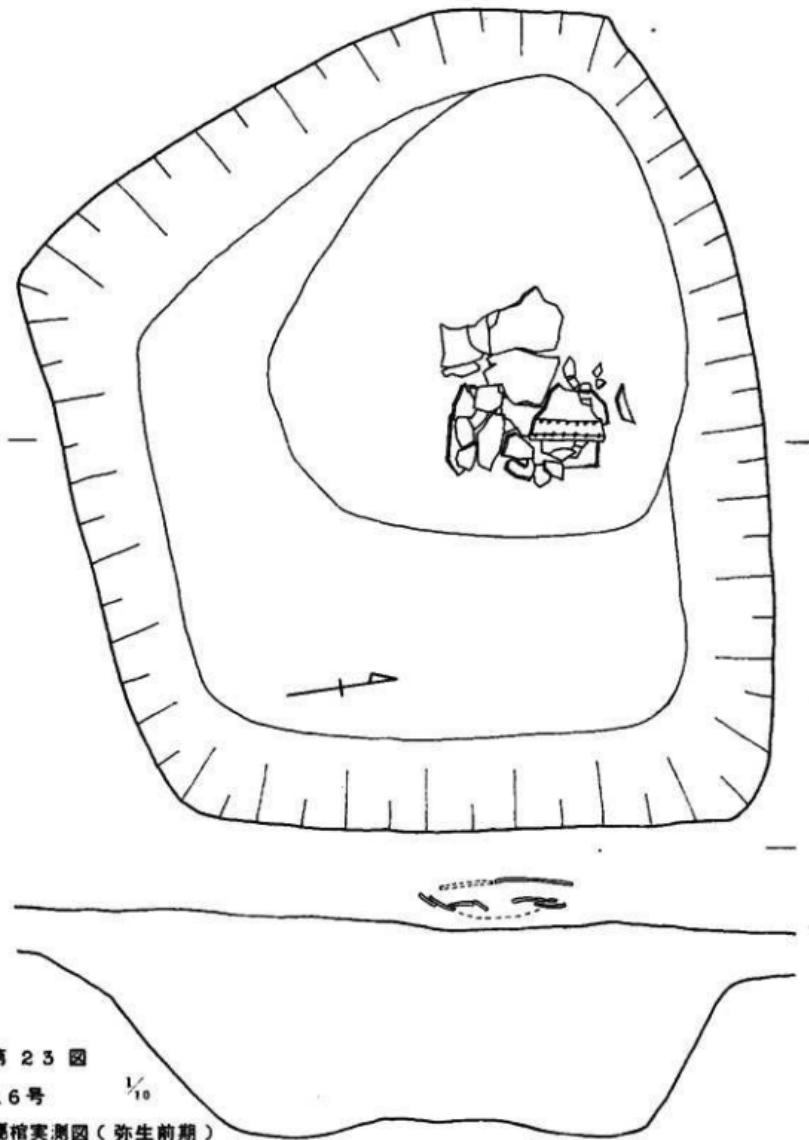
第 20 図 14号 麦棺実測図  $\frac{1}{10}$



第 21 図 17号 麦棺実測図  $\frac{1}{10}$



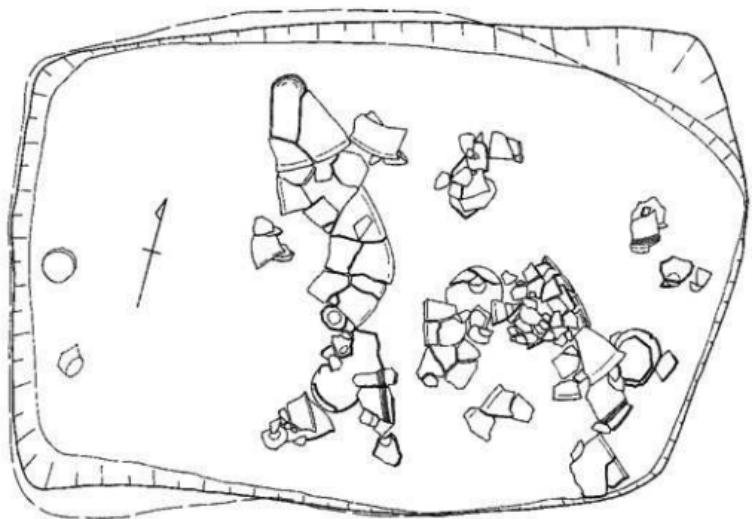
第 22 図 15号 壺棺実測図  $\frac{1}{10}$



第 23 図

16号  $\frac{1}{10}$

墓棺実測図(弥生前期)



第 24 図 土 塚-1 遺物出土状況実測図  
(弥生時代前期)

#### 4. 驚 横

| 番 号 | 山土地区 | 口縫部の方向      | 埋め方    | 出抜口の大きさ(cm) | 残存状態 | 掘方規類(cm)   | 解 説  |
|-----|------|-------------|--------|-------------|------|------------|--|
| 1 号 | D-3  | N-63°-E     | 横位     | 4.8         | 3/4  | 無          | 口縫部を下と横筋間に2条の割込みで屈曲がなめぐる。此部は突出した原形に2条の割込みで屈く。      |
| 2 号 | C-5  | S-9°-W      | 横位     | 4.4         | 1/2  | 凹地程度・深8    | 口縫部より脇骨まで2条の屈曲がなめぐる。口縫部より小さく骨頭出した原形に2条の屈曲がなめぐる。    |
| 3 号 | C-8  | S-1-23°0'-E | 横位     | 4.6         | 2/6  | 怪71・深15    | 口縫部より脇骨まで2条の屈曲がなめぐる。やかなカーブを描き体節にいたる。               |
| 4 号 | C-8  | S-37°30'-W  | 斜め上方   | 4.5         | 2/6  | 怪47・深7     | 口縫部より脇骨まで2条の屈曲がなめぐる。頭部に屈曲させている。                    |
| 5 号 | C-8  | N-45°-E     | 斜め上方   | 4.1         | 2/6  | 怪70・深8     | 口縫部より脇骨まで2条の屈曲がなめぐる。ややいがれである。                      |
| 6 号 | D-8  | S-84°-E     | 横位     | 4.5         | 1/2  | 無          | 口縫部より脇骨まで2条の屈曲をもつ。するどく体節へと屈曲する。                    |
| 7 号 | D-8  | S-83°-E     | 斜め上方   | 3.6         | 1/6  | 凹地程度・深7    | (盗掘事例III)ケツリ筋が脇骨付近に二枚貝殻をもつて屈曲させられる。6号と同様のタイプと見られる。 |
| 8 号 | C-7  | S-35°30'-E  | やや斜め上方 | 4.2         | 1/2  | 凹地程度・深8    | 口縫部より脇骨まで2条の屈曲をもつ。するどく屈曲して体節にいたる。                  |
| 9 号 | E-6  | S-30°-E     | 側位     | 2.0         | 1/2  | 長140巾60深40 | 口縫部と斜筋に計2条の割込みがなめぐる。放量に割込みがなめぐる。また下顎部に直角の上顎部がある。   |
| 10号 | E-5  | N-41°-E     | 立位     | 1.8         | 1/6  | 怪31・深14    | 口縫部は放量に欠損されている。                                    |
| 11号 | C-5  | S-6530'-E   | 横位     | 3.0         | 1/6  | 怪62・深15    | 口縫部より内側にゆるやかなカーブを描き、脇骨でやや屈曲している。                   |
| 12号 | D-3  |             | 立位     | 2.0         | 1/2  | 怪28・深16    | 1号と同じ底部放量に欠損されている。                                 |
| 13号 | C-5  |             | 立位     | 2.2         | 1/6  | 怪30・深27    | 残存状態が最も悪く、10・12号と同様のものである。                         |
| 14号 | C-6  | S-82°-E     | 横位     | 2.5         | 1/6  | 無          | 体節のみ突出である。ヘラケシリされている。                              |
| 15号 | E-7  | N-5530'-E   | 横位     | 4.9         | 1/2  | 長180巾70深18 | 9号同様、下顎施設として、若干の石が散かれ、最下部に土灰をもつ。体節は二枚目により彫刻されている。  |
| 16号 | D-7  | N-84°30'-W  | 横位     | 3.6         | 1/6  | 怪50・深23    | 10・12・18号に比べ大型のものである。                              |
|     |      |             |        |             |      | 無          | 体節はヘラケシリにより彫刻されている。                                |
|     |      |             |        |             |      |            | 学生時代前頭のもので、歯を2個出た合せ口強化である。                         |

表 墓棺出土時の觀察表

注：相方規範は最大区であり一部欠けの場合補定規範である。

遺物の大きさは出土地点でのものであり、復元すると異なるものである。  
標本については現在、まだ未整理であるため、出土時点のものと、後に岩十觀察したものである。

## 第Ⅳ章 まとめ

今回の発掘調査の結果、縄文時代晩期の甕棺14基・下部に土塙の施設をもつものの2基他、土塙・柱穴。弥生時代前期の合せ口甕棺1基他、土塙・柱穴。中期の竪穴住居跡等の遺構が検出されたことにより、遺跡が縄文時代から弥生時代へと続いていることが判った。このことから現在のところ茨木市における最古の集落であったこと、また三島地域における縄文時代から弥生時代への移行期の問題を拠めるひとつの資料として貴重なものであった。

当遺跡では全部で17基の甕棺が検出されたが、うち16号は、調査区域の東側で北から南へと巾約10mの浅い谷状の凹地となっているD-7地区から出土した弥生時代前期の合せ口甕棺である。この浅い谷状の凹地の土砂の堆積は、下層に黒色粘質土層が堆積し、上層には調査区域の約 $\frac{2}{3}$ にみられる茶褐色粘質土層（包含層）が堆積している。この下層の黒色粘質土層が堆積して、他地区の地山の上面とはほぼ同一レベルとなった時点で16号が埋葬されたと考えられるので、他の縄文時代晩期の甕棺とは同一時期に並存はしないと考えられるものである。残りの16基はいずれも縄文時代晩期の甕棺である。この16基の甕棺について未整理であるが調査での出土状況や土器型式の上で若干の検討を加えると、9号は、（第14図・第15図・図版9）甕の下部施設として長方形の土塙が検出されているところから、まず土塙を掘って遺体を埋葬した後、こぶし人の石を土塙の上面に敷き若干の土砂を盛って、さらにその上に甕を置いたと考えられる状況での検出である。このことから甕内に直接埋葬されたものではなく、甕を墓石のように目印し的な役割を果たす意味で置かれたものと考えられる。これと同様のものに15号がある。10号・12号・13号・17号の4基は、いずれも体部上半部と底部を故意に打ち欠いたと思われ、下半部のみをピット状の掘方に埋めたものである。これらの出土地点周辺は、17号を除きピット状遺構が多く検出されている地点であり、このピット状遺構の意味を考えると同時に、甕棺とピット状遺構の関連性をも考える必要性のあるものと思われる。他の10基の甕棺は、体部等に一部故意的な打ち欠き部分がみられるものもあるが、そ

の大きさや出土状況等から龕内部に幼児骨を直接埋葬したものと考えられる。

また土器型式の上でも若干の前後がみられるが、11号は波状口縁をもち、7号は体部ヘラケズリされ頸部を二枚貝により調整されているところから、滋賀里遺跡出土の晩期土器型式分類のうち、滋賀里Ⅲに比定されるものであり、耳原遺跡出土の龕棺では最も古いものと考えられる。6号・8号は7号も含めて口縁部より体部への屈曲がかなり脱くもつものであり、これらも古い型式のものと考えられる。他に15号は二枚貝の調整であるところからこれも若干古い型式のものである。1号・2号・9号はそれぞれ口縁部と肩部にあたるところに刻み目を施した突帯文をもつものであり、うち1号は、口唇部よりわずか下部に一条の突帯がめぐらされており、横ナデ調整された頸部をはさんで体部とのくびれ部の境にもう一条の突帯がめぐらされた合計二条の突帯をもつ高さ約48cm、口径約85cmで小さな突出した平底をもつものである。2号も同様に二条の突帯がめぐらされているが、その形態は口縁部より小さな突出した平底に至るまで屈曲なしに弧を描いて続くものであり、また口縁部の突帯が口唇部にめぐらされている点が1号と異なるところである。これらは先述の滋賀里遺跡の土器型式分類のうち、滋賀里Ⅳあるいはもう少し新しくなるものと思われる。  
(註2)

こうした龕棺の出土状況や型式分類以外に、龕の外側にススの付着がみられる。ススはいずれも体部の下半部には付着していない。このことは地面上下半部を埋めたか、周囲に石等をおいて固定していたために火のあたりがなかったと考えられる。こうしたススの付着から、生活上に使用していた煮沸用の龕を棺として利用したものであることがうかがえる。このことは今まで使用していたものを単純に棺として間に合わせたと考えると同時に、生活必需品である龕を棺として利用しているところに何かの意味をもっていたとも考えられる。

他に土塙の検出のみであるが、9号・15号の下部の土塙と同じ形態をもつものも数基検出されており、その大きさから成人等を埋葬した墓であると考えられる。

これら龕棺を埋葬した位置は、あまり統一性がみられないことから墓域とまでいかなくとも墓地であったことがうかがわれ、それも居住地域にあまり離れない

ころの周辺であることが判った。

次の弥生時代の遺構も検出されているが、同一地山上面に鍾乳期のものまで存在すること、ひとつの遺構内出土の遺物は同一時期に限られていることなどから、縄文時代晩期と弥生時代前期は並存するものでなく続いているものと理解できる。

弥生時代前期の遺物については、B-2 地区の土塙-1 によってほぼ理解できるものである。遺物の詳細についてはもう少し検討しなければならないが、唐古遺跡の出土土器によって分類されたところの畿内第 I 様式の新しい段階のものがほとんどである。そうすると耳原遺跡では、土器型式上ではあるが、畿内第 I 様式の中頃以前のものが出土していないことになり、前代の縄文時代晩期との間に時期的空白があるようと思われる。しかし晩期から続く生活が、一度絶えたとは、土の堆積状態や遺物の出土状況から考えにくいものである。ということは土器型式の上で空白時期はあっても、実際の生活には空白時期はなかったと考えられるものである。このことは小さく耳原遺跡のみで考えるよりも、三島平野全体として、また他の遺跡との比較検討をする必要がある。

三島地域には、弥生時代前期からの大きな拠点的集落として、東奈良遺跡と安満遺跡がある。この両遺跡は、畿内第 I 様式の遺物はかなり出土しているが、その中に最も古い段階とされるに確証たるものが出土地していない。これらは短絡的ではあるが、耳原遺跡の出土遺物の時期と共に通しているところである。とするとこの三島地域には、畿内第 I 様式の古い段階のものがもともとなかったのか、まだ見つかっていないのか、もしかなかったとするはどうしてなかったのかという問題が生じてくる。これらのこととは今後の課題として煮つめていかなければならぬ問題である。

以上の様に、耳原遺跡は、約4 km南の東奈良遺跡とともに、集落の性格は異にしながらも、茨木市域における拠点的集落であったことがうかがえたのである。

注1： 9号・15号も便宜上櫛格と呼称する。

注2： 梶拓良氏に御教示を得た。

注3： 大船孝弘氏に御教示を得た。

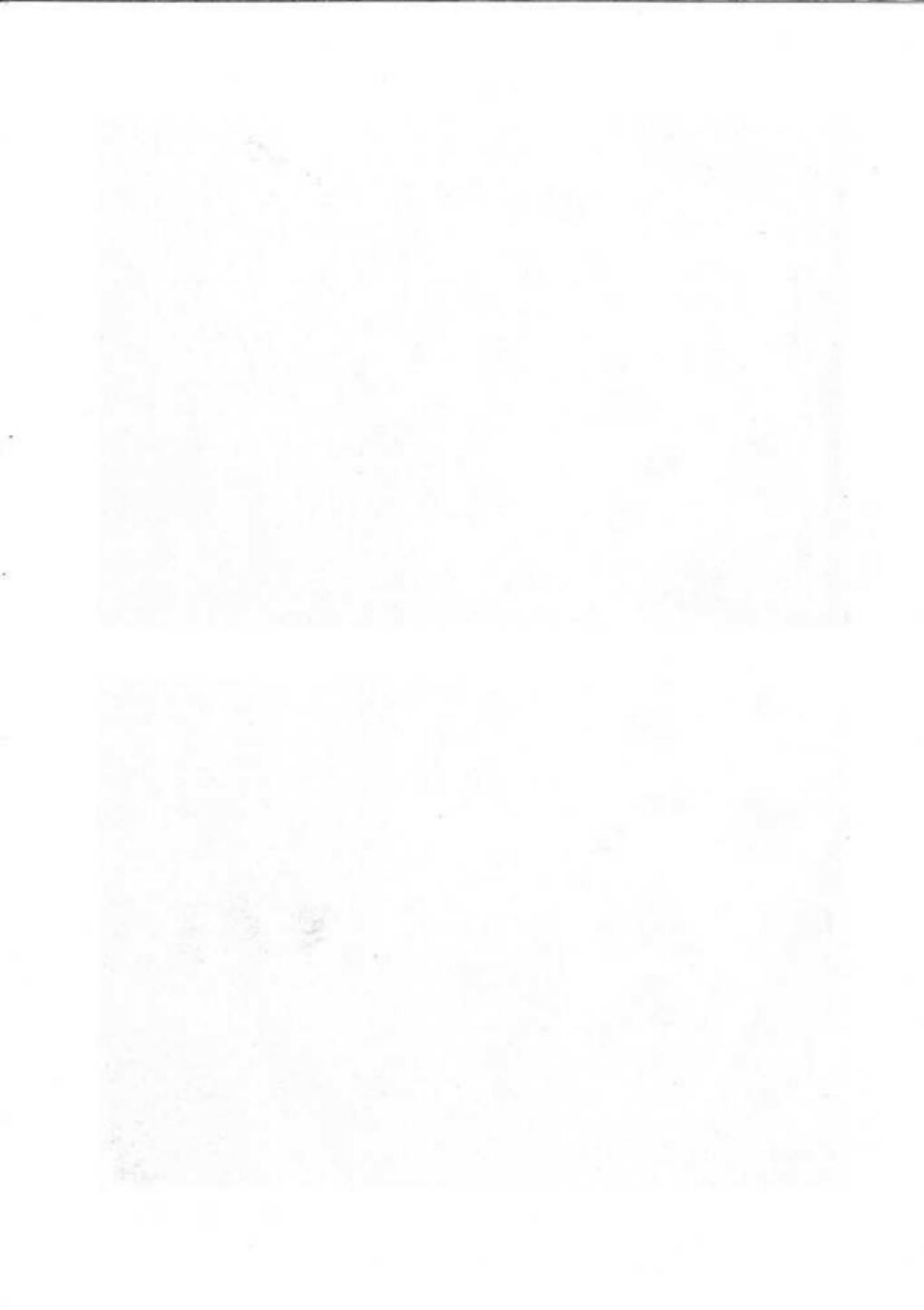


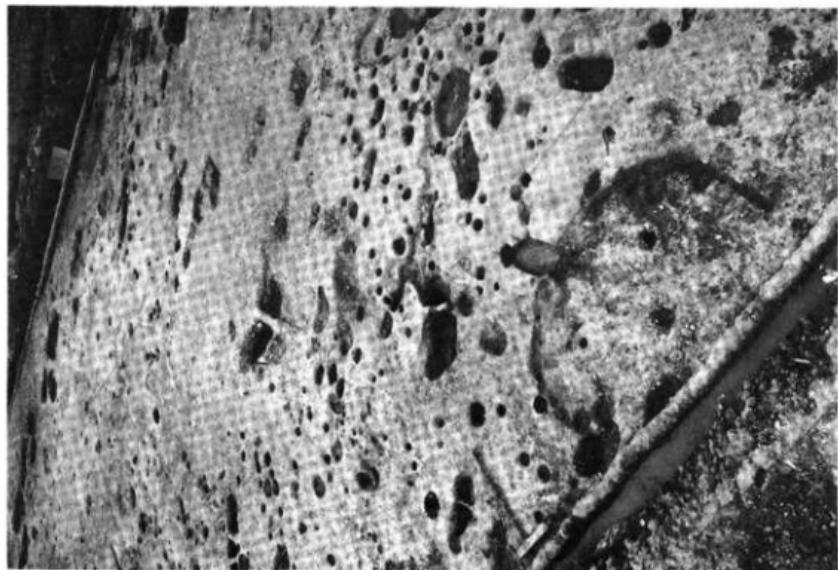
造構全体

造構全体

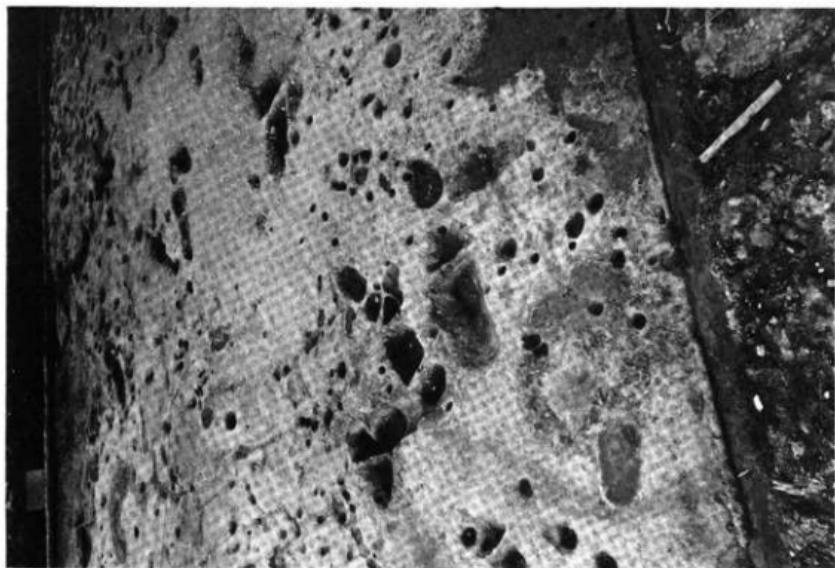
1



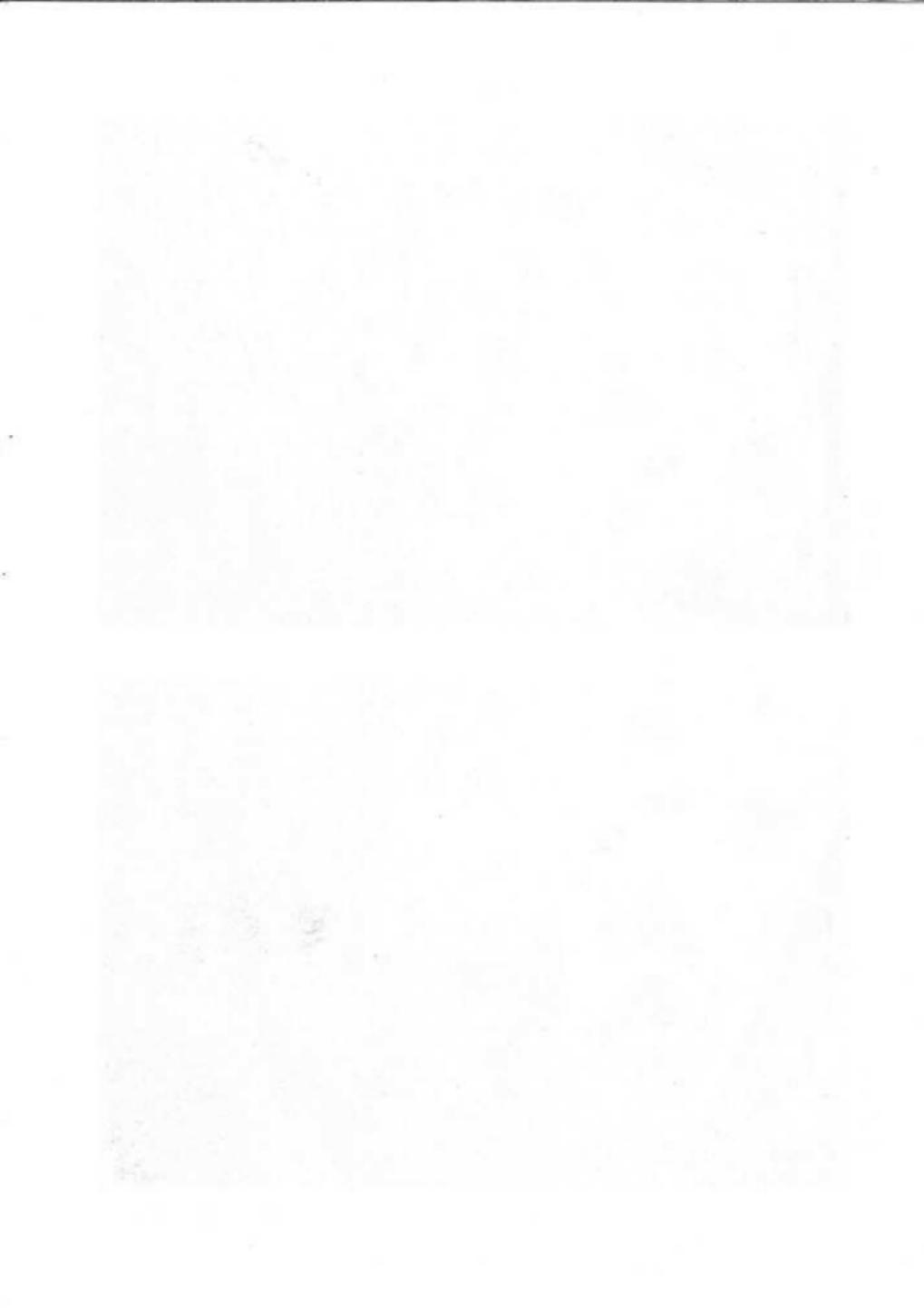




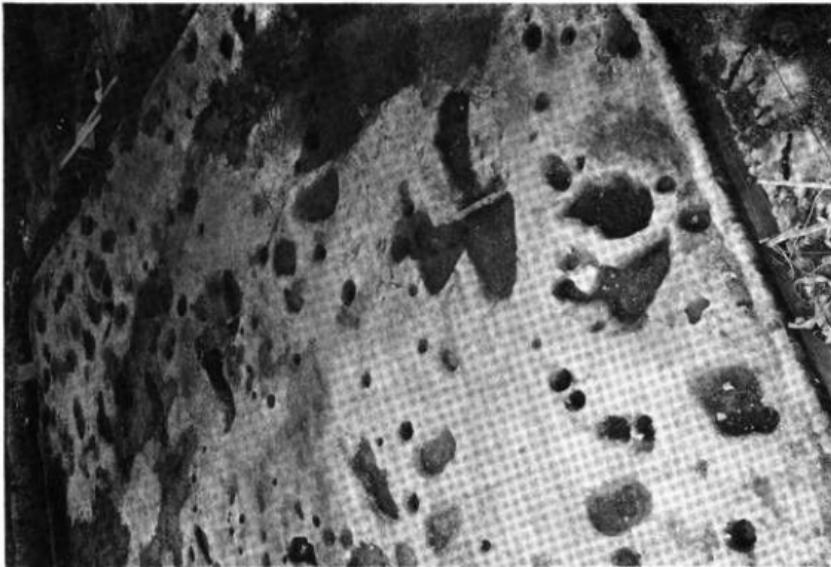
遗構全体



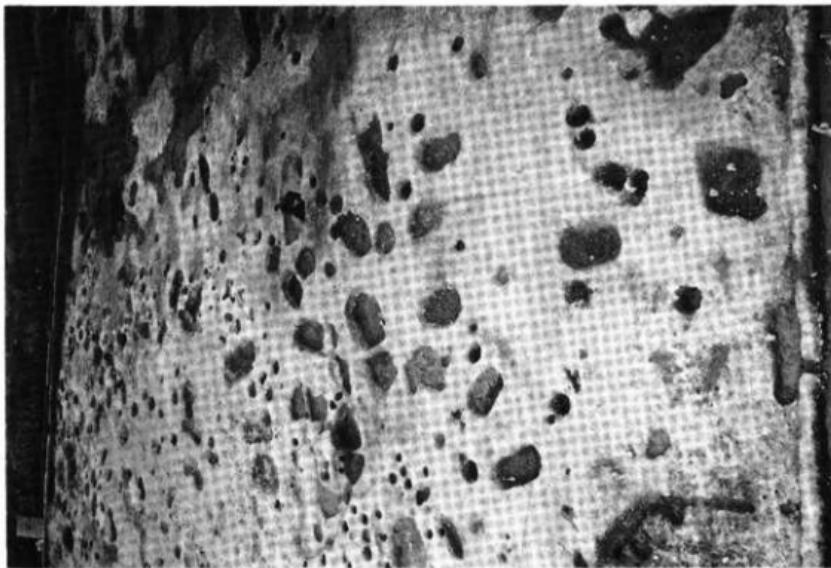
遺構全体

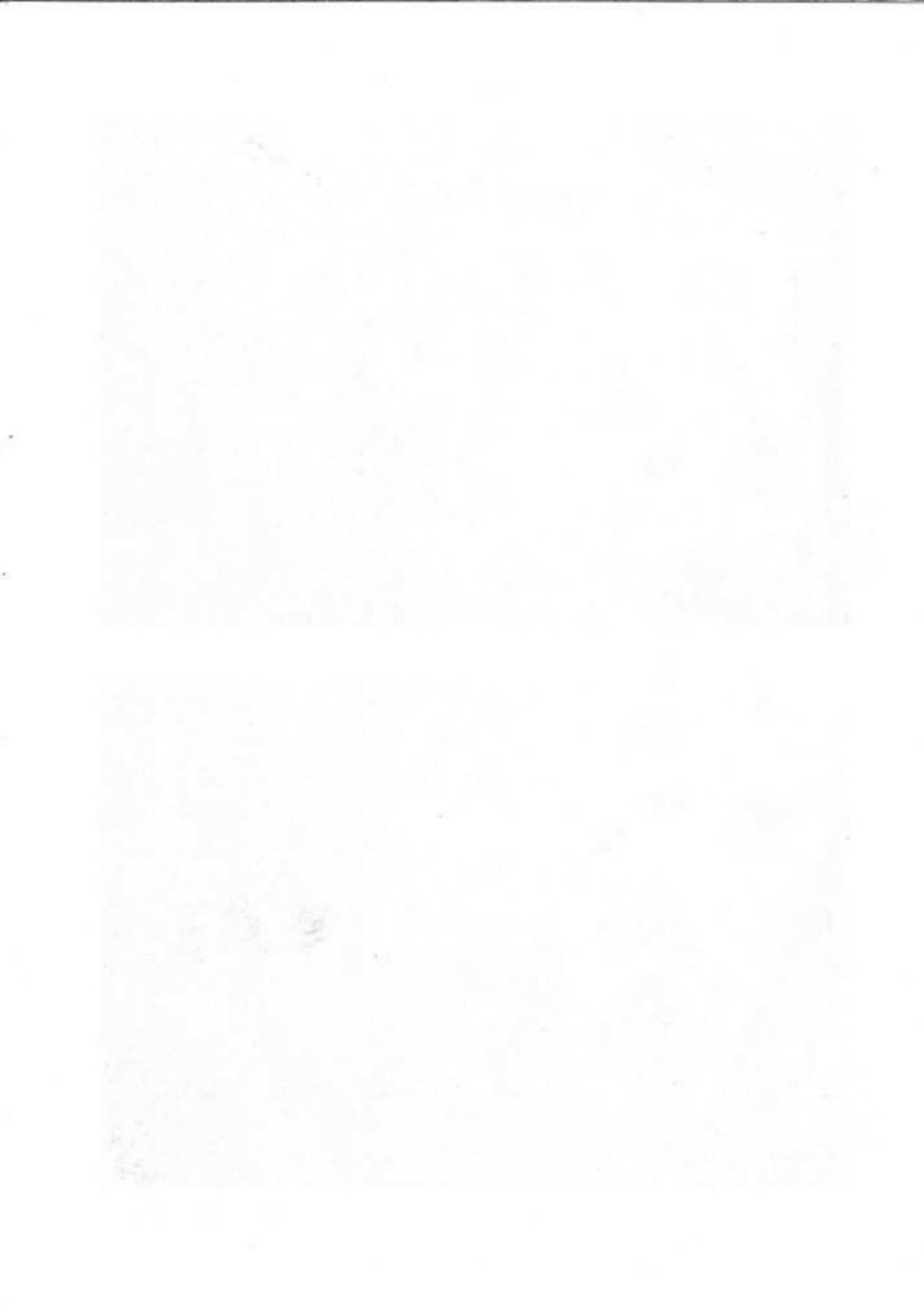


遺構全体



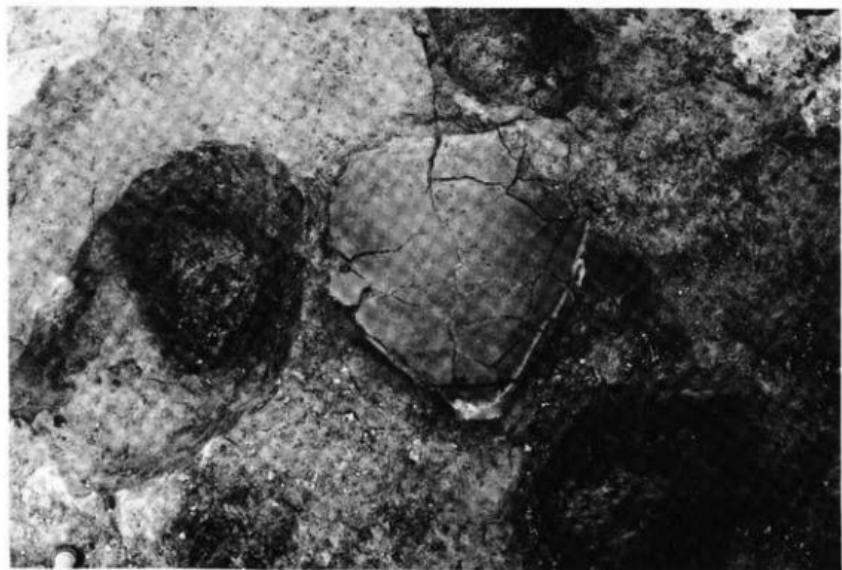
遺構全体







1号漆棺出土状況

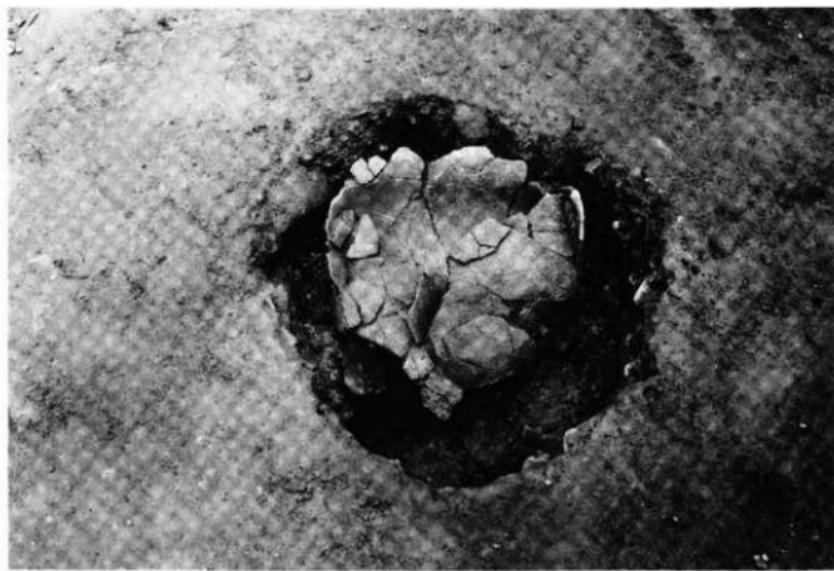


2号漆棺出土状況



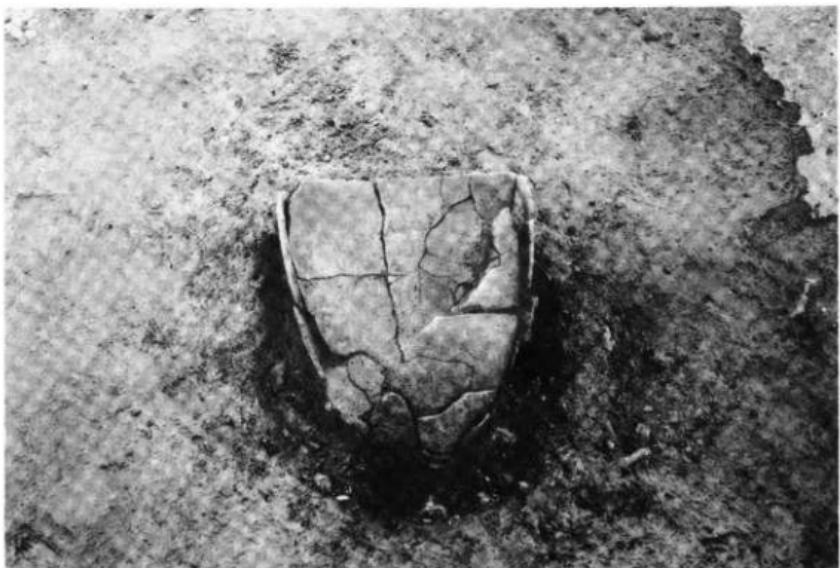


3~6号壺棺出土状況（北より）



3号壺棺出土状況





4号壺棺出土状況

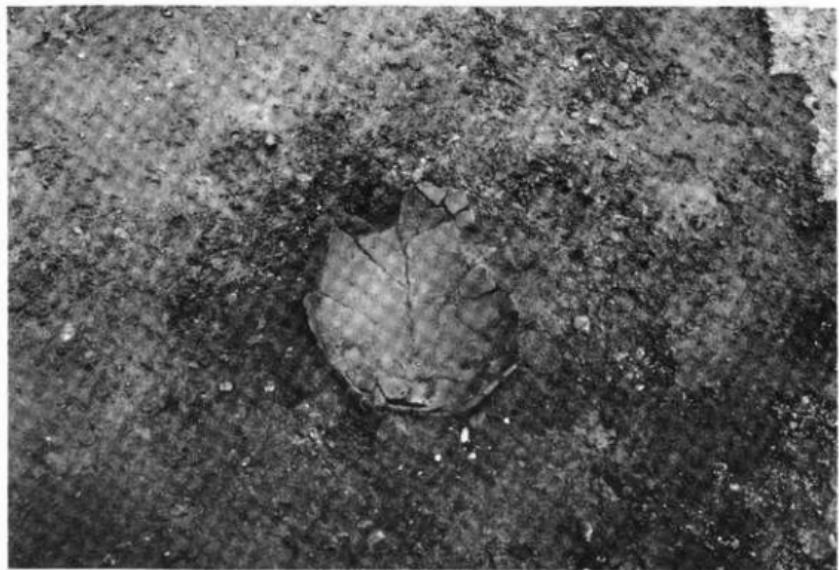


5号壺棺出土状況





6号甕棺狀況



7号甕棺出土狀況